
< 書 評 >

「脳卒中問答」——患者理解からリハビリテーションまで——

「STROKE—the condition and the patients」

John E. Sarno
Martha T. Sarno 共著

七沢病院部長 福井 罔彦 都老人総合研究所室長 笹沼 澄子
七沢病院 竹内 愛子 虎の門病院 物井 寿子 共訳
伊藤病院 稲枝 道子

荻 島 秀 男

一読しておもしろい形式の本であるし内容も興味深い。

脳卒中に関して一般の方々および医療に従事している方々も自分の身边に対象者が出ないかぎり、ばくぜんと過ごしているのが現実ではないだろうか？

脳卒中で現われる症状は実に多彩で身体機能障害（主として片麻痺）のみならず精神的、心理的症状はもちろんのこと、感覚障害、言語、思考、感情、すべてに問題がある。

それだけに家族の不安も大きく医療担当者への信頼感、不信感などが浮きぼりにされる傾向が強いのもこの疾患の特徴であろう。著者はニューヨーク大学で教鞭を取っておられるサルノ夫妻で、夫君はリハビリテーション専門医、夫人は言語病理学者である。

この問答集は脳卒中のリハビリテーションを広くとらえ、特に言語機能に関して設問も多い。

脳卒中の原因、脳卒中に伴う身体的問題、脳卒中に伴う言語障害、脳卒中に伴う知的および情緒の側面、リハビリテーション、予後の6章に分けられ、それぞれの章で普通家族がリハビリテーション関係の医療担当者に質問するような内容の設問がなされ、それに説明を加える形式で構成されている。

これらの設問は必ずしも家族のみでなく、実際に患者と接しておられる方でも、普通リハビリテーション医学に接する機会の少ない方には興味深いのではないかと感じられる。

たとえば、失語症や構音失行の種類には、どんなものがあるでしょうか？

歌を歌ったり、数をかぞえたりすることはできるのに、なぜ話せないのでしょうか？

いつから言語治療を始めるべきでしょうか？失語症患者はどんな種類の言葉から回復していくのでしょうか？

活字体と筆記体のどちらを教えたらよいのでしょうか？（日本語では仮名および漢字のどちらから？）

患者が間違ったら訂正すべきなのでしょうか？

患者が自分で人に電話をかけるように励ましたほうがよいのでしょうか？

失語症はからだが良くなるにつれて改善するのでしょうか？
などである。

今まで脳卒中に関して多くの本が出版されているがこの本の特色は言語障害と脳卒中に伴う知的および情緒の側面の章であろう。

したがって訳者も言語関係の方々が主体となって分担しておられる。

ただ対象者が患者の家族のみならず脳卒中の診療にたずさわる一般の医療スタッフも含めての設問なので専門書であるようで専門書でないような中間的な本に終わっているが、文章は平易で読みやすく、飽きさせない。

言語の専門教育および資格制度がわが国ではまだまだの感が強いが、リハビリテーションチームメンバーとしての言語専門職を考えれば大学のレベルで言語病理の教育が始められるのが望ましい。一般の大学（特に文化系）卒業1年足らずの講習会でただ言語面のみを勉強したのでは患者を全体的に把握するのはとうていできないであろうし、Sp (speech pathologist) と称するのはおかしい。この書は脳卒中患者のリハビリテーションに従事される PT, OT, ST, ナース、医師、すべての職種の方々、特に行政の面で心身障害に関与される方々はもとより脳卒中患者の面倒を見られる家族のメンバーおよび開業医諸氏にもぜひ一読をおすすめしたい。

このような意義ある書の翻訳にあられた福井、笹沼氏らのご努力に対して心から敬意を表したい。

（東京都養育院付属病院）

A 5・頁 215・図12

¥2,300 千110・医学書院刊